

当事者と仲間の発信型による発達障害学生支援プロジェクト

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害行動分析クラスター
三橋 真人

本論文は、わが国の大学等における発達障害学生の修学支援の現状を踏まえて、A大学での当事者と仲間の発信型による発達障害学生支援プロジェクトをとりあげ、きっかけから結果までの過程を分析し、今後の大学等における発達障害のある学生の支援のあり方について、ひとつの支援の方法論を積み上げることを目的としたものである。

わが国の高等教育機関には、2010年には障害学生が8,810人在籍し、障害種別内訳で、発達障害(診断書有)が12.1%を占めている。現在、わが国の各大学は、修学支援方法の確立に向けて、試行錯誤ながら、発達障害学生の修学支援のひとつ一つのケースを積み上げることに於いて、「対応」から「システムの確立」へ、を目指している。

筆者のゼミ学生たちが、発達障害学生の入学を機に、当事者の大学生活の支援をしたいと申し出てきたことから、発達障害学生支援プロジェクトが始まった。支援学生は支援過程のなかで、「今後も同じ悩みを持つ学生が入学してくると思うので、自分達の活動を単発で終わらせたくない」という思いから、障害学生支援サークルが出来た。次に、サークル学生達は、大学に対し、大学側も障害のある学生が学びやすい環境づくりや修学支援サービスを整備すべきであると考えた。その結果として、彼らは学部長に直談判で自分達の考えを訴えるという行動に出た。大学側が学生達の要望を聞き入れ、大学内に障害学生支援委員会が出来上がった。そして、障害学生支援委員会と障害学生支援サークルは相互に連携・協力する関係と位置付けられて、A大学における障害学生支援の一步が踏み出されることになった。

本研究の考察として第1に、当事者を支援している学生達に、教員や職員の意識の変化が「正の強化」をフィードバックし、学生達の援助行動はより強化されたと考えられる。A大学で、学内でのボランティア活動に対して、単位を認定するというような制度を整えていけば、学生達の支援は「正の強化」で、より活性化されるものと考えられる。

第2に、わが国では、高校から大学へ、生徒の個別支援計画を移行する概念がまだない。アスペルガー症候群をはじめとする発達障害のある学生を支援するためには、高等学校からの移行がスムーズに行われることが望ましいと考える。しかしながら、特別支援教育は、義務教育時期の個別教育計画と個別移行計画の重要性は認識しているものの、義務教育から高等学校へ、さらに高等教育機関への個別教育計画と個別移行計画の仕組みは不十分である。大学等教育における発達障害学生への支援においても、個別移行計画に基づいた支援であることが望まれると考える。シームレスな支援の再考が求められている。